

小学校教員採用に向けて現状の分析と今後の対応

札幌学院大学 人文学部 こども発達学科 松井 光一

1. はじめに

2024（令和6）年度こども発達学科の教員採用候補者選考検査教員採用数は、小学校14名、特別支援学校小学部3名となり、北海道・札幌市・他県の受験をすべて合わせると、現役希望者の合格率は、68.0%となった。

本学の教員採用検査受験者の3分の2は、現役で合格していることになる。北海道の教員採用系大学の教員採用割合が、ここ数年6割程度であることを考えると、本学の現役学生の頑張りは評価されてよいと考える。

実際に教員となって、小学校や特別支援小学部の教育現場に立っている本学卒業生は次のような実態になっている。

学校訪問や研究授業指導訪問等で教育現場を訪れると、「札幌学院大学出身の教員は非常に優秀である」「教育系大学生に引けを取らず一生懸命頑張っている」などと言われることが多くなった実感がああったが、札幌市内校長会による教育実習事後アンケートによると、札幌学院大学の教育実習生は、「大変まじめに取り組み、何より一生懸命であった。」「実習生は、何事にも意欲をもって実践していた。」「意欲をもって取り組む学生で、大変素晴らしいと感じた。」「実習中に多くのことを学ぼうと、一生懸命な姿が印象的であった」と評価されており、高評価の実感は間違いなかったことがわかる。

一方で、本学卒業生教員の中では、ここ5年間で（把握をしているだけで）、退職が2名、途中で休職（1か月から1年）が2名いる。理由は多様である。

このような状況の中で、こども発達学科の定員割れという危機的状況を打破し、本学の小学校教員採用アップに向けて、こども発達学科の現状を分析し、教員採用率を上げる方策を考えるとともに、教員として教職を辞めずに教職を続ける力をつけていくために、何が今必要かを明らかにしていきたい。

なお、本学人間科学科から1名が北海道小学校教員採用となり、本学からの現役小学校教員合格者数は14+1で15名であるが、本稿では、こども発達学科の取組の考察のため、小学校教員の対象を、こども発達学科在籍で登録学校種の小学校及び特別支援学校小学部の教員として考えることとする。また、採用検査結果発表後の進路変更などが考えられるので、今回は10月6日時点でのデータをもとに論じていくこととする。

2. こども発達学科の小学校教員採用結果の考察

2-1 本年度の『2024年度小学校教員採用検査』の結果から

1次検査の受験者と2次検査合格者の数から現役合格率を考えると、上述したように68.0%となる。しかし実際には、1次検査受験者の中に、進路は民間等に内定しているが「教員免許取得のため、教員採用検査を受験する」というルールがあって受験している学生もいる。下記の表1内の別進路の部分である。「教員採用検査が不合格だったので進路変更した」というわけではなく、別進路で1次検査の勉強を全く行わなかった学生、2次検査を受験していなかった学生がいた。教員志望だが不合格だった学生とは違うのである。

教員になりたいという学生が受験した結果からとらえると、1次検査受験者25名中進路変更の6名を除いた19名となる。これが、表1の下線部分のように、2次検査合格者17名と教員志望で不合格となった2名を足した19名という意味である。

表1 札幌市、北海道、宮城県小学校教員採用受験者 2024年度小学校教員採用検査結果 2023年度生

北海道・札幌市等	総数	教員志望者	その他（民間・決めていない等）
1次検査受験者	25名		
1次検査合格者	22名	22名	不合格者3名は別進路
<u>2次検査合格者</u>	<u>17名（小14・特小3）</u>	<u>2名不合格</u>	不合格者5名の内3名は、別進路

教師志望者が何人合格したかという視点で見ると、2次検査の合格率は、 $17 \div 19$ で89.5%となる。小学校教員希望者の約9割が現役で教員になれることがわかる。

北海道と札幌市を比較すると、北海道小学校教員希望者は、教員志望者の教員採用率が100%となり、札幌市は33.3%（札幌市希望1次合格者3名中1名合格2名不合格）となっていることから、本学に入学すれば、北海道の小学校教員には100%になれることがわかる。

2-2 過去3年間の『小学校教員採用検査』の結果から

過去3年間の結果は下記の表2のようにになっている。

表2 『2023年度小学校教員採用検査』結果 2022年度生

北海道・札幌市等	総数	教員志望者	その他（民間・決めていない等）
1次検査受験者	30名		
1次検査合格者	23名	25名（2名不合格）	不合格者7名の内5名は、別進路
2次検査合格者	18名（小15・特小3）	4名不合格	不合格者5名の内1名は、別進路

『2022年度小学校教員採用検査』結果 2021年度生

北海道・札幌市等	総数	教員志望者	その他（民間・決めていない等）
1次検査受験者	19名		
1次検査合格者	17名	17名	不合格者2名は別進路
2次検査合格者	13名（小9名・特小4）	2名不合格	不合格者4名の内2名は、別進路

『2021年度小学校教員採用検査』結果 2020年度生

北海道・札幌市等	総数	教員志望者	その他（民間・決めていない等）
1次検査受験者	25名		
1次検査合格者	19名	19名	不合格者6名は、別進路
2次検査合格者	14名（小7・特小7）	5名不合格	不合格者5名は教員志望

2-1で分析したように、表2の下線部分をもとに教員志望者の教員合格率を出して、今年度結果とともに比較したのが下記の表3である。

表3 3年間の教員志望者の合格率の比較

	教員志望者の教員合格率	採用検査合格者÷教員志望者
『2024年度小学校教員採用検査』結果 2023年度生	89.5%	$17 \div 19$
『2023年度小学校教員採用検査』結果 2022年度生	81.9%	$18 \div 22$
『2022年度小学校教員採用検査』結果 2021年度生	86.7%	$13 \div 15$
『2021年度小学校教員採用検査』結果 2020年度生	73.7%	$14 \div 19$

このように、こども発達学科の小学校教員志望者の合格率は3年前まで7割台だったが、2022年度結果から8割台となっている。ここ3年間8割台をキープし、今年度が最大値となり約9割近くになっている。

2-3 札幌市の『小学校教員採用検査』の結果から

北海道の教員志望者の合格率は100%となったが、札幌市の教員志望者の合格率は33.3%（3人に1人）と低い。また、下記の表4のように、年度によっては0という結果もあった。札幌市の教員採用の壁は非常に高いといえる。

表4 札幌市の教員採用検査合格率の4年間の比較

	教員志望者の教員合格率	採用検査合格者÷教員志望者
『2024年度小学校教員採用検査』結果 2023年度生	33.3%	1÷3
『2023年度小学校教員採用検査』結果 2022年度生	0.0%	0÷4
『2022年度小学校教員採用検査』結果 2021年度生	50.0%	2÷4
『2021年度小学校教員採用検査』結果 2020年度生	0.0%	0÷5

しかし、昨年度までの3年間で札幌市教員採用検査不合格者は11名いるが、全員が札幌市小学校の期限付教諭として勤務してきており、その後の受験において、11名中約半数の5名が、不合格後3年以内に札幌市小学校教員採用検査を突破している。その他の6名の期限付教諭についても、現在まで小学校現場内の評価や評判が良く、今後の合格が期待されている。

ここ4年間の札幌市での現役の合格率は、16名中3名と18.8%であるが、4年間で札幌市小学校教員になったのは、16名中8名と50%である。本学こども発達学科の現役生と卒業生を合わせると、卒業後4年目までに半数の50%が札幌市小学校教員になっていることがわかる。


2-4 小学校教員採用検査対策の実際

現在の小学校教員採用検査1次検査対策としては、各ゼミ担任や教職担当教員が個別に学生に対応して成果を上げている。これに加えて次の対策があり、前述したような合格率アップにつながっている。

① 教員採用検査対策予備校の講座

教員採用検査対策予備校の中には、学生の負担が少ない講座や、今までの実績がある講座もある。しかし近年受講者が減っているのが現状である。

② 人間科学科の佐藤満先生の勉強会

こども発達学科ではないが、人間科学科の佐藤満先生の勉強会の存在が1次検査突破を支え、2次検査にも大きな力を発揮している。「ミツルメソッド」と筆者がよんでいる検査対策は効果抜群であり、この勉強会に出席しているこども発達学科生は全員1次検査を突破し、2次検査でもほとんどが合格している。

③ 教員採用2次対策講座

2次検査対策としては、こども発達学科の教員採用2次対策講座（チーフ安木先生）があり、今年度は下記の表5のように実施された。

表5 教員採用2次対策講座概要（全て個別面接）

<第1段階>	7月第1週	参加16人	延べ34回	昨年より9名増加
<第2段階>	7月第1、2週の土曜日全日	参加16名 (卒業生1名参加)	延べ48回	昨年より2名増
<第3段階>	7月第2週から 8月採用検査前々日まで	参加は18名 (卒業生2名参加)	延べ134回	

3. 教員採用検査合格率アップのために

3-1 学生ボランティアの活用

5年前の「教育実践演習」の最終レポートに書かれた卒業生教員（札幌市の小学校教員採用検査に合格し、現在札幌市教員2校目となる。こども発達学科主催の「授業づくりセミナー」では本年度授業者を務める）の授業カードの抜粋である。

・・・この4年間で、教師になるための勉強をさまざましてきたが、最初のうちは実感がないまま毎日ただ過ごしているような様子だった。自分が小学生のころを細かく覚えていたわけでもなく、小学校の教師としてどのように授業をすれば良いのか、子どもと関われば良いのか、皆目見当がついていなかった。

そうした中で、イメージが少しずつできるようになってきたのは、3年からはじめて学生ボランティアである。実際の現場を見ることで、教師としての振る舞い方を感じることができた。そのイメージを1年の時からもっていたかったとは思うが、過去の自分を責めることもできないし、するつもりもない。その遅れをあとの残りの時間で取り戻すことが大切だと考える。

もし後輩たちに伝えられる機会があるならば、1年のうちからボランティアやほかの活動で現場を見ることを勧めたい。・・・
(下線は筆者)

この話にあるように、こども発達学科で小学校教員を目指す学生は、3年生の後期に「教職特別演習」があり、ここで教員採用に向けての講義が本格化していく。しかし、必修ではないのでいつも人数が少なかった。「教職特別演習」を受講しない学生は、この時期（後期9月）からさらに遅れて、3年後期の1月から3月に始まる「教育実習事前指導」まで、大学としての教員採用に特化した講義としてのコマはない。

このことから前述の卒業生は、現役時代に学外の教師師範塾（元北海道教育委員会教育長が主管する団体）に仲間と通うなど対策を自らとっていたのである。

そこで本学安木先生は、教員採用検査対策として、また教員として学校現場に出ても十分通用する力をつけるため、小学校現場に学生を送り出すことを教職担当教員らとともに準備していった。それが学校ボランティアの活用である。

学校ボランティア自体は、札幌市教育委員会や江別市教育委員会などが独自に行っているが、学生が講義等で、実際に現場に出てみたいと意欲をもった時にすぐに行けるのではなく、申し込み時期が早すぎて間に合わなかったり、行きたいときに行けないという自由度がなかったりして、学生にとっては行きづらいものとなっていた。

安木先生は、学生一人一人に実習時の傷害保険が出ていることを確認し、こども発達学科が小学校と交渉しそのネットワークを広げることを試行している。

現在、安木先生発信の学校ボランティアには、4年生で7名、3年生で12名、2年生で2名の計21名が、札幌市内の5小学校に派遣されている。ボランティア参加者は、一様に実際の小学校現場で学ぶことに充実感と満足感をもっている。その思いは、大学で学ぶ講義の中でも意欲的な発言や行動を生み出している。

現在、小学校教員を確保するために、行政では教員採用検査の前倒しで3年生の時期に4年生の時の検査「教養」を先に受けるなど色々と方策を練っている。しかし大切なのは、現役学生が教師としての力をつけて、自らよい教師になりたいと思って学んでいくことが大事である。そのためにも、実際の小学校現場を体験することが必須である。

今後この学生ボランティアの活用の良さを広げていくためには、教育実習と並び、学生ボランティアを講義のコマとして、単位を与えていくようなシステムが望まれる。実際に小学校現場は、教員不足や期限付教諭の枯渇など、疲弊している。だからこそ、大学の学生ボランティアに協力し、教員不足解消、力のある新卒教員に期待しているのである。

今こそ、講義として認め単位を与えることによって学生ボランティアの人数を確保し、実際の小学校現場に参加することが、学生の質的向上につながり、さらには教育実習へのスムーズな流れとなって教員採用率もアップすると考える。

3-2 高校訪問の工夫

こども発達学科の定員割れという危機的状況を打破するために、学科会議等においても建設的な議論がなされている。高校訪問に積極的にいくという入口対策は効果的であると考え、その工夫の一つとして次のような実践を考えている。

本学の子ども発達学科に入学して学ぶことによって、現在100%間違いなく北海道教員になれる状況にある。札幌市の教員も、現役合格者とその後の期限付きを経過した者を合わせた合格率は50%である。

まず、この事実を各高校に知らしめるべきである。様々な校種の教員が、全くこのことを知らず、「札幌学院大学で教師になれるんですね。知らなかった」という声が多い。また、いつも国公立の教員採用系大学の二番手は某私立大学という評判があり、定員が少ないということで、他の大学よりも合格率が低いのではないかという認識がなされている。

「札幌学院大学で教員になれる」ということが全く周知されていないのか、周知されてないとは言えないが魅力のある先生がいない、そして魅力のある大学ではないと思われているのだろうか。

大学訪問による講義の紹介や高校にお邪魔しての出前講義、オープンキャンパスの授業なども学生にとっては良いものであることは間違いのないと思われる。

原稿を書いている段階ではまだ実現していないが、札幌市の私立高校と連携して次のような工夫を考えている。

高校の1年生を対象にロングホームルームの時間（50分程度）を使い、その高校の卒業生で札幌学院大学の教職を学び卒業して3年間期限付教諭としてがんばり、ついに来年から札幌市の小学校教員になるという人を講師として派遣し、高校生の質問を受けたり、大学教員とその卒業生との対談を通して大学での学びを想像させるというものである。

期限付き教諭としての努力や苦勞、大学での学びが 札幌市教員採用という大きな壁を越えてなしとげたその事実を知らせることが、高校生が本学で学び教員になりたいという憧れを抱いてくれることにつながるのではないかと考えている。

この作戦がうまくいけば、別の高校でも、卒業生の母校の高校に同じようなシステムでお邪魔して、札幌学院大学の教職課程の良さ、教員への魅力を感じてもらえるのではないかと考え計画を練っている。

4. 終わりに

本学は教師になるための教員採用系の大学ではない。大学の講義をはじめサークル活動や部活動など、またはアルバイトも含めてせっかく入った大学生活を謳歌してほしいと思う。その中で、自分の将来の仕事に教員という選択肢をもち、教員になるための勉強を楽しく意欲的に頑張る事に精進して欲しいと考える。

下のカードは、今年度札幌市の小学校教員採用検査に合格（3人中1人）し、来年4月から札幌市の新採用教員となる学生の「教職実践演習」の講義の中での「後輩に伝える」としたコメントの一部である。

私は、教育実習(4年生のゴールデンウィーク明け)まで正直教員になるか迷っていました。しかし、札幌市の教育実習を通して札幌市の小学校教員になろうと決めました。もうすでに教員採用検査まで3週間を切っていましたが、佐藤満先生の勉強会に突然お邪魔させていただき、同じテキストを何度も繰り返し勉強して1次検査を合格することができました。消防士を目指していた人が教育実習に行って、小学校教員を目指し見事翌年合格した卒業生の話を大学の先生方はしてくれます。けれど、実習が終わった後、本気で教員になろうと思って自ら積極的に先生に助けを求めて、勉強すれば大丈夫です！あとは、日頃から教育に関することにアンテナを張ること、毎回の講義を真剣に受けていたことがよかったのかなと思います。(下線部筆者)

この学生は、教育実習で5年生の担当となり、40人近い学級の中で外国語の授業をし、3週間を力いっぱい有意義に過ごし充実感を味わった。そのモチベーションが、1次検査合格後、2次検査の面接練習を約2ヶ月で13回（平均11回）受けるなどの努力につながったのである。このように、時間がなくても自分のやる気スイッチを押すことで、

教員の道、札幌市の高い壁を乗り越えることができたのであろう。この学生が1年生の時から、保育士の免許と並行して学び、毎回の講義をしっかりと受け、自分なりに常に課題をもち学んできた学生だからこそそのなせる業かもしれない。

しかし、教育実習前に、今回提案した学生ボランティアを1年生から実施できる環境をつくり、講義のコマとして単位を認めることで、小学校教員への意欲的なスタートが可能ではないかと考える。1年生から4年生まで、行ってみたいときに行くことができ、単位として認められる学生ボランティア制度を確立・進化させていきたい。

今回は、本学卒業生教員の退職や休職に関して、教員として教職を辞めずに教職を続ける力をつけていくための方策を詳しく述べられなかったが、こども発達学科として次の5点に注目して実践していきたい。

特に、非認知能力の向上について取り組むことが必要であると考え。詳しくは参考文献を参照されたい。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 授業づくりセミナーの深化② 教師教育研究協議会（教職課程主催）小学校分科会の工夫③ 教職担当講義のさらなる改善④ 江別キャンパスに小学校模擬教室を再現⑤ 非認知能力の向上のための方策 |
|---|

引用文献

- [1] 松井光一（2018）.「新学習指導要領をめぐる－どう大学の講義を改善していくか」SGU教師教育研究第33号 8－12
- [2] 松井光一（2021）.「授業づくりセミナーの実践から」SGU教師教育研究第36号19－24.
- [3] 松井光一（2022）.「非認知能力の一考察」SGU教師教育研究第37号36－40.